

## 日蓮聖人の上行菩薩自覚

### はじめに

日蓮聖人は「依法不依人」の教えに従って法華經に帰依されたという。(1)『報恩抄』に、

不依人と申は仏を除き奉て外の普賢菩薩・文殊師利菩薩乃至上にあぐるところの諸人師なり(2)

とまで述べられている。このように法を絶対化された一方で、聖人は自らを「法華經の行者」と宣せられ、『立正安国論』の上呈に始まる二度の国家諫暁を行うなど、実に個性的且つ主体的な生涯を送られている。これは聖人の法華經の受容の仕方に原因があると思われる。聖人をして聖人せしめたものの、それは、日蓮は法華經とともに生きる者であるという自覚ではないだろうか。とすれば、聖人の法華經信仰の表明ともいふべき立教開宗の時から、その生涯に渡って絶えることなく、そのような意

渡 辺 彰 良

識が存在したはずである。聖人の生涯や教学を考える上で、自覚という問題は大きな意味を持つと思われる。そこで、これらの問題について考察を加えようと思う。

### 一

日蓮聖人が独自の法門を完成されたのは佐渡流罪以降であって、それ以前は天台大師の教学の復興者の立場をとっていたと見ることが一般的な見解であろう。しかし、少なくとも、建長五年の立教開宗以後、一人の宗教者として独自の道を歩まれたことは明らかである。『開目抄』には、

日本国に此をしれる者、但日蓮一人なり(3)

とあるが、茂田井教亨先生も述べられているように、立教開宗の時点で既に「法華經をもつて如来信実の聖教と把握」(4)していたはずである。法華經信仰の表明が身命

に及ぶ迫害を換起するであろうことは、当然熟知されていたのである。

これを一言も申出さなければ父母・兄弟・師匠<sup>ニ</sup>・国王<sup>ニ</sup>・王難必来<sup>ル</sup>べし。いわずば慈悲なきにたり<sup>(5)</sup>

とあるように、法華經を説くべきか、迫害を恐れてやめてしまおうか、という逡巡があつたのである。そこで聖人は、

宝塔品の六難九易これなり。(中略)法華經は一句一偈<sup>モ</sup>末代に持<sup>チ</sup>がたと、とかる、はこれなるべし。

今度強盛の菩薩心ををこして退轉せじと願しぬ<sup>(6)</sup>

と、例えどのような迫害や法難があろうとも法華經を持つとうとの決意をされたのである。これは「我不愛身命但惜無上道」という法華經の文に従つた、不退轉の決意である。このような誓願を立てられたときから、日蓮聖人は、宗教者として自覺的に生きる道を選ばれたのであつて、ここに末法の衆生救済のために行動する地涌の菩薩としての契機が存在するのである。

## 二

『立正安国論』の上程は、法華經の文の示す如く、松葉ヶ谷の草庵焼打、伊豆流罪という法難を招いた。この

ような大難は、法華經流布を決意された時より、聖人自ら法華經の文に当たられて予見されていたものである。聖人にとって、たび重なる大難は法華經色読という大きな法悦であり、法華經の真実を証すとともに、法華經に生きる日蓮という自覺につながるものであつた。

伊豆に流されて八か月後の弘長二年正月に著された『四恩鈔』には、

二千余年已前に説れて候法華經の文にのせられて、留難に値べしと仏記しをかれまいらせて候事のうれしさ申<sup>シ</sup>盡難く候<sup>(7)</sup>

と法華經色読のよろこびを、「法華經の文にのせられて」と述べられている。このような法華經との一体感こそ聖人の法華經受容の特色であり、自覺の問題と関わっているのである。続く文で、

是は法華經を弘るかと思<sup>フ</sup>心の強盛なりしに依て、惡業の衆生に讒言せられて、かゝる身になりて候へば、定て後生の勤にはなりなんと覺<sup>ユ</sup>候。是程の心ならぬ昼夜十二時の法華經の持經者は、末代には有がた<sup>ク</sup>こそ候らめ<sup>(8)</sup>

と、自らを「法華經の持經者」とされている。「昼夜十二時」という法華經色読をもって「末代には有りがた

い」と述べられていることから、末法の「法華經の持經者」には色讀は必然のことと考えられていることがわかる。

聖人は、『四恩鈔』に続いて弘長二年二月十日に『教機時国鈔』を著わされ、五義を立てられた。五義は、法華經を知る者である「知教者」が、末法の衆生を法華經によつて導びいていくという、師の主体性によつて成り立っている。すなわち、

知<sup>レ</sup>教者無<sup>レ</sup>之<sup>ヲ</sup>讀<sup>ム</sup>法華經<sup>ヲ</sup>者無<sup>レ</sup>之<sup>ヲ</sup>讀<sup>ム</sup>法華經<sup>ヲ</sup>者  
無<sup>レ</sup>之<sup>ヲ</sup>無<sup>レ</sup>国師<sup>トナル</sup>者<sup>ニ</sup>也。無<sup>レ</sup>国師<sup>トナル</sup>者<sup>ニ</sup>国中諸人迷<sup>フテ</sup>  
一切經之大小権実顯密差別<sup>ニ</sup>於<sup>テ</sup>一人<sup>ニ</sup>離<sup>ル</sup>生死<sup>ヲ</sup>者  
無<sup>レ</sup>之<sup>ヲ</sup>結句成<sup>ハリ</sup>謗法者<sup>ト</sup>（9）

とあるように、仏法が栄えているのに、法華經が信仰されず、ひいては国が栄えないのは、「知教者」がいないためであると考えられている。

知<sup>ル</sup>法華經<sup>ハ</sup>一切經之中第一經王<sup>ナリト</sup>是知<sup>ル</sup>教者<sup>也</sup>（10）

の文からわかる通り、五義を説かれたということは、日蓮聖人自ら「知教者」であることを表明されたものである。（11）その末文に、

不<sup>レ</sup>顯<sup>ハ</sup>三類敵人<sup>ヲ</sup>非<sup>ス</sup>法華經行者<sup>ニ</sup>。顯<sup>ス</sup>之<sup>ヲ</sup>法華經行者<sup>也</sup>（12）

と、自身を「法華經の行者」と表明されたのである。

小松原法難の一月後に著わされた『南条兵衛七郎殿御書』に、

第四卷云、而此經者如来現在猶多<sup>シ</sup>怨嫉<sup>ヤ</sup>況滅度後<sup>ヲ</sup>。  
第五卷云、一切世間多<sup>ク</sup>怨難<sup>シ</sup>信等云云。日本国に法華經よみ学する人これ多し。（中略）法華經の故にあやまたる、人は一人なし。されば日本国の持經者はいまだ此經文にはあわせ給はず。唯日蓮一人こそよみはべれ（13）

と、法師品・安樂行品の文を引いて、法華經を色讀した者は日蓮一人であると述べられている。続けて、

我不愛身命但惜無上道是也。されば日蓮は日本第一の法華經行者也（14）

と、勸持品の文を挙げて、「日本第一の法華經の行者」であると表明されたのである。

たび重なる法難という法華經色讀によつて、「我不愛身命」という勸持品の八十万億那由陀の菩薩の誓願と、聖人の誓願とが一つになり、法華經に記された日蓮との確信を強められ、法華經の行者としての自覺を明確にされたのである。『法門可被申様之事』の

日本国には日蓮一人計こそ世間・出世正直の者にて

は候へ(15)

の文は、聖人の師的意識の台頭を示している。このような意識が、

一閻浮提にありがたき法門なるべし(16)

の文にあるように、教学思想の確立につながるのである。文永八年五月述作の『十章鈔』は、そうした聖人の教学完成の前奏となるものである。

一念三千の出処は略開三之十如実相なれども、義分は本門に限<sup>ル</sup>。爾前は迹門の依義判文、迹門は本門の依義判文なり。但真実の依文判義は本門に限<sup>ル</sup>べし

(17)

の文は、天台の一念三千を継承しながらも、聖人独自の教義である本門の一念三千を明示している。ここには、聖人が、法華経を「知教者」としての主体性のもとに捉えたという自信がある。

佐渡流罪を契機として地涌の自覚を得られた聖人ではあるが、すでに佐渡流罪以前にその前提があったのである。そもそも立教開宗の時点で、聖人には我不愛身命の宗教者としての主体性があつた。それがたび重なる法難といった法華経の色読によって師自覚を深められ、聖人独自の教学が形成され始めていたのである。

### 三

佐渡流罪は聖人の自覚の上に大きな影響を及ぼした。

『寺泊御書』には、

勸持品云<sup>ニ</sup>、有<sup>ニ</sup>諸無智人<sup>一</sup>、惡口罵詈<sup>ス</sup>等云云。日蓮當<sup>レリ</sup>此經文<sup>ニ</sup>。(中略) 及加刀杖者等云云。日蓮讀<sup>ハ</sup>此經文<sup>ニ</sup>。(中略) 数数見擯出。数々度々也。日蓮擯出衆度<sup>ニ</sup>。流罪二度也(18)

と、勸持品の文を挙げて、法華経色読成就の悦びを語られている。

勸持品の二十行の偈を色読された以上、「八十万億那由陀の菩薩」と聖人の間には、否定できないつながりがあるのである。

日蓮、八十万億那由陀<sup>ノ</sup>諸菩薩<sup>ノ</sup>為<sup>シテ</sup>三代官<sup>ト</sup>申<sup>レ</sup>之<sup>ヲ</sup>(19)

の文は、八十万億那由陀の菩薩の法華経末法流通の誓願を、聖人自身の誓願として受けとめるという決意の表明なのである。

佐渡に着かれた聖人は、『富木入道殿御返事』の中で、天台伝教は粗<sup>ボ</sup>釈<sup>シ</sup>給へども弘<sup>メ</sup>浅<sup>セル</sup>之<sup>ヲ</sup>「一大事の秘法を此国に初めて弘<sup>ム</sup>之<sup>ヲ</sup>」(20)

と、末法の今こそ、天台・伝教も説かなかった「一大事

の秘法」が説かれることを示し、

日蓮豈非其人乎<sup>(21)</sup>

と、日蓮こそその人であると語られている。そして、

此大法弘まり給<sup>ツ</sup>ならば爾前迹門の經教は一分も益なかるべし<sup>(22)</sup>

と、本門教学・本門の一念三千等を密示されているのである。また、

經云、有四導師一名上行云云<sup>(23)</sup>

とあるように、聖人は、上行菩薩の代弁者としてこの法を説くことを明かされているのである。

『開目抄』で、聖人は「法華經の行者」としての自己を強調され、さらには日蓮こそ法華經の色読者であつて、日蓮あつての法華經であるとして述べられている。

而に法華經の第五の卷勸持品の二十行の偈は、日蓮だにも此国に生ずは、ほとおど世尊は大妄語の人、八十万億那由陀の菩薩は提婆が虚誑罪にも堕ぬべし。經に云、有諸無智人、惡口罵詈等、如刀杖瓦石等云云。(中略) 日蓮なくば此一偈の未來記妄語となりぬ<sup>(24)</sup>

又云、数々見擯出等云云、日蓮法華經のゆへに度々ながされずば数々の二字いかんがせん。(中略) 但

日蓮一人これをよめり<sup>(25)</sup>

このように、勸持品の二十行の偈を實踐したのは日蓮ただ一人であつて、「数々見擯出」を読んだのは、伊豆・佐渡と流された日蓮の他にはないという自負が、法華經の行者は日蓮であるという自覚を表明させているのである。『開目抄』は、末法における法華經流通者について、最も力強く述べたものであり、「法華經の行者」という、如来使としての強い自覚の上に成り立つと言えよう。

『觀心本尊抄』は言うまでもなく、『開目抄』の人開頭に対して、法開頭として知られており、聖人の教學の一つの成果である。その觀心法門は、聖人の地涌の自覺の上に初めて成り立つものと言える。

『開目抄』では、「日蓮は法華經の行者である」ということを、法華經色読者の主体性に立って証明したのであるが、『觀心本尊抄』では、末法の唱導師を地涌の菩薩との関わりで論じている。地涌の菩薩の自覺に関する明確な言及はないものの、觀心法門が地涌の主体性に依つて初めて捉えられる以上、その関係は無視できないであろう。すなわち、

此本門、肝心於<sup>テハ</sup>南無妙法蓮華經、五字、仏猶文殊藥王等、不<sup>ニ</sup>付<sup>シ</sup>屬<sup>ス</sup>之<sup>ヲ</sup>。(中略) 但召<sup>シテ</sup>地涌千界、説<sup>テ</sup>八品<sup>ヲ</sup>

付<sup>シタマフ</sup>属<sup>ヲ</sup>之<sup>ニ</sup>(26)  
如<sup>レ</sup>是<sup>ニ</sup>現<sup>シテ</sup>十<sup>ノ</sup>神<sup>ノ</sup>力<sup>ヲ</sup>地<sup>ノ</sup>涌<sup>ノ</sup>菩<sup>ノ</sup>薩<sup>ニ</sup>属<sup>ニ</sup>累<sup>シテ</sup>妙<sup>ノ</sup>法<sup>ノ</sup>五<sup>ノ</sup>字<sup>ヲ</sup>(27)

と、地涌の菩薩だけが妙法五字を付属されたことを明している。そして、

召<sup>テ</sup>地<sup>ノ</sup>涌<sup>ノ</sup>千<sup>ノ</sup>界<sup>ノ</sup>大<sup>ノ</sup>菩<sup>ノ</sup>薩<sup>ヲ</sup>壽<sup>ノ</sup>量<sup>ノ</sup>品<sup>ノ</sup>肝<sup>ノ</sup>心<sup>ヲ</sup>以<sup>テ</sup>妙<sup>ノ</sup>法<sup>ノ</sup>蓮<sup>ノ</sup>華<sup>ノ</sup>經<sup>ヲ</sup>五<sup>ノ</sup>字<sup>ヲ</sup>令<sup>メ</sup>授<sup>セ</sup>与<sup>セ</sup>閻<sup>ノ</sup>浮<sup>ノ</sup>衆<sup>ノ</sup>生<sup>ニ</sup>也<sup>ニ</sup>(28)。

此時<sup>ニ</sup>地<sup>ノ</sup>涌<sup>ノ</sup>菩<sup>ノ</sup>薩<sup>始</sup>出<sup>テ</sup>現<sup>シ</sup>世<sup>ニ</sup>但<sup>テ</sup>以<sup>テ</sup>妙<sup>ノ</sup>法<sup>ノ</sup>蓮<sup>ノ</sup>華<sup>ノ</sup>經<sup>ノ</sup>五<sup>ノ</sup>字<sup>ヲ</sup>令<sup>ム</sup>服<sup>セ</sup>幼<sup>ニ</sup>稚<sup>ニ</sup>(29)

本<sup>ノ</sup>門<sup>ノ</sup>四<sup>ノ</sup>依<sup>ノ</sup>地<sup>ノ</sup>涌<sup>ノ</sup>千<sup>ノ</sup>界<sup>ノ</sup>末<sup>ノ</sup>法<sup>ノ</sup>始<sup>ニ</sup>必<sup>ニ</sup>可<sup>シ</sup>出<sup>ス</sup>現<sup>ス</sup>。今<sup>ノ</sup>遣<sup>ハ</sup>使<sup>ハ</sup>還<sup>ハ</sup>告<sup>ハ</sup>地<sup>ノ</sup>涌<sup>也</sup>(30)

と、繰返し、地涌の菩薩が妙法五字をもって末法の衆生を救済することを述べられている。このことは、聖人が地涌の菩薩の自覚を持っておられたことの証しである。

『開目抄』の「法華經の行者」は、勸持品の二十行の偈の実践者である。これは、聖人の法華經色読者としての主体性の上に法華經の行者の出現が語られる以上当然のことと言えよう。

それに対して、『観心本尊抄』では、釈尊の付属を契機として、地涌の菩薩の出現の必然性とともに、出現の意味づけが成されている。すなわち、末法の衆生救済は、迹化や他方の菩薩ではだめで、地涌の菩薩でなければな

らず、地涌の菩薩の使命は、一念三千仏種たる妙法蓮華經の五字を末代凡夫に受与せしめるところにあると明示されているのである。

こうしてみると、勸持品の二十行の偈の実践者という「法華經の行者」日蓮は、末法の衆生救済を使命とする「地涌の菩薩」と別には存在し得ないものと理解できるのである。

『開目・本尊両抄』を著わされた聖人は、『諸法実相抄』に、

日蓮末法に生れて上行菩薩の弘め給べき所の妙法を先立て粗ひろめ(31)

地涌の菩薩のさきがけ日蓮一人也(32)

豈<sup>ニ</sup>日<sup>ノ</sup>蓮<sup>ノ</sup>が弟子檀那地涌の流類に非<sup>ス</sup>や(33)

と、弟子檀那を地涌の流類と述べられ、自身を地涌の上首たる上行菩薩と比較されている。

聖人は『三沢抄』に

さどの国へながされ候し已前の法門は、ただ仏の爾前の經とをばしめせ(34)

と述べられたが、そこには地涌上行の自覚という問題があったのである。佐渡で打ち建てられた、本門の一念三千という法門は、地涌上行の自覚の上に成り立っている

のである。

流罪を赦免され、身延に入られた日蓮聖人は、上行菩薩の自覚を明確にされていく。

『法華取要抄』には、

日蓮捨<sup>ハテ</sup>二<sup>ニ</sup>広略<sup>ヲ</sup>「好<sup>ム</sup>肝要<sup>ヲ</sup>」。所謂上行菩薩所伝<sup>ヲ</sup>妙法蓮華經<sup>ノ</sup>五字也<sup>(35)</sup>

と述べられ、『新尼御前御返事』には、

上行菩薩等を涌出品に召<sup>シ</sup>出させ給<sup>ヒ</sup>て、法華經の本門の肝心たる妙法蓮華經の五字をゆづらせ給<sup>ヒ</sup>て<sup>(36)</sup>

『選時抄』には、

上行菩薩に妙法蓮華經の五字をもたしめて<sup>(37)</sup>

と述べられている

『本尊抄』では「地涌の菩薩」が五字を付属されたと表現されていたことから比べると、聖人の上行菩薩自覚がより明確に表われているといえよう。

## おわりに

佐渡流罪を契機として、地涌上行の自覚を得られた日蓮聖人ではあったが、既にそれ以前にその前提があったのである。自ら立てられた「我不愛身命・但惜無上道」の誓願と、勸持品の八十万億那由陀の菩薩の誓願とが、

受難という法華經色読によって一つとなり、法華經の行者日蓮という自覚を持たれ、独自の法門が形成され始めていたのである。それが佐渡流罪を通じて、地涌上行の自覚へと昇華し、本門の法門が完成したのである。

ただ、聖人の教学の中心とも言うべき『本尊抄』では、上行の自覚は明かされていない。このことをどのように捉えるかは、佐渡期の聖人を考える上で重要と思われる。聖人の自覚に関するより綿密な研究と併せて、今後の課題としたい。

## 註

- (1) 定遺一一九四頁参照
- (2) 定遺一一九四頁
- (3) 定遺五五六頁
- (4) 「日蓮聖人における法華仏教の展開」  
(『中世法華仏教の展開』所収)
- (5) 定遺五五六頁
- (6) 定遺五五七頁
- (7) 定遺二二六頁
- (8) 定遺二二七頁
- (9) 定遺二四四頁
- (10) 定遺二四三頁
- (11) しかしながら、まだ師判はなく、教法流布の先後という

客観的項目が当てられている。これについて、浅井田道先生は、「五義判の形成課程の考察」(『大崎学報』一一八号所収)に、師判を秘められて序判を立てられたとする説を論じられている。

- (12) 定遺二四五頁
- (13) 定遺三二七頁
- (14) 定遺三二七頁
- (15) 定遺四五五頁
- (16) 定遺四四八頁
- (17) 定遺四八九頁
- (18) 定遺五一四―五頁
- (19) 定遺五一五頁
- (20) 定遺五一六頁
- (21) 定遺五一六頁
- (22) 定遺五一六頁
- (23) 定遺五一六―七頁
- (24) 定遺五五九頁
- (25) 定遺五六〇頁
- (26) 定遺七一二頁
- (27) 定遺七一二頁
- (28) 定遺七一六頁
- (29) 定遺七一九頁
- (30) 定遺七一六―七頁
- (31) 定遺七二五頁

- (32) 定遺七二五頁
- (33) 定遺七二六頁
- (34) 定遺一四四六―七頁
- (35) 定遺八一六頁
- (36) 定遺八六七頁
- (37) 定遺一〇一七頁